

千臨技サーベイ試料における ALB の方法 間差について

○三末高央(船橋市立医療センター) 雨宮将史(千葉県こども病院) 長谷健二(東千葉メディカルセンター) 吉川康弘(亀田総合病院) 吉田俊彦(千葉大学医学部附属病院)

【はじめに】千葉県臨床検査技師会精度管理調査臨床化学検査部門(以下、千臨技サーベイ)では、毎年ヒトプール血清を用いた外部精度管理を実施している。近年、各項目の標準化が進み、測定データが概ね収束してきたことから、評価は各施設で採用している機器、方法、試薬に左右されずに一律な目標値を設定することが望ましい。しかしながら一部の脂質項目と ALB については、反応性の違いから方法および試薬別の目標値を算出し評価しているのが現状である。そこで今回 ALB に着目し、千臨技サーベイ試料における BCG 法(以下、G 法)と BCP 改良法(以下、P 法)の方法間差の調査を行った。【対象と方法】対象は 2012 年度から 2014 年度(3 年間)に用いた千臨技サーベイ試料とした。また各試料の蛋白分画を行い G 法と P 法の方法間差の原因を調べた。なお、蛋白分画はエバライザー 2 ジュニア(ヘレナ研究所)を用いたアガロースゲル電気泳動法によって実施した。【結果】千臨技サーベイにおける 3 年間の ALB 目標値の平均は、試料 1:G 法 $3.013 \pm 0.13 \text{ g/dl}$, P 法 $2.777 \pm 0.13 \text{ g/dl}$, 試料 2:G 法 $4.207 \pm 0.09 \text{ g/dl}$, P 法 $4.113 \pm 0.09 \text{ g/dl}$ であった。G 法と P 法の ALB 目標値の差の平均は、試料 1:G 法 $0.24 \pm 0.04 \text{ g/dl}$, P 法 $0.09 \pm 0.01 \text{ g/dl}$ であり、試料 1 の方が試料 2 より G 法と P 法に差があった。蛋白分画の結果においては、試料 1 の方が α 分画の割合が多かった。【考察】千臨技サーベイ試料は、各項目に濃度勾配を付けるため試料 1 と 2 ではプールする血清の内容(濃度)が異なる。そのため片方の試料には急性相反応物質が多く含まれる傾向があり、 α 分画の割合に差が生じた。このことが試料 1 の方が G 法と P 法の差を大きくした要因であると示唆された。

連絡先 047-438-3321